コラムの文章構造

―― 語句の反復表現を手がかりに ――

塩　澤　和　子

1　はじめに

本稿では日本の新聞コラムを取り上げ，その文章構造について語句の反復表現を手がかりに考察することを目的とする。

コラムは，『広辞苑』(第五版) によると「①円柱　②新聞・雑誌の囲み記事。短評欄」とあり，『大辞林』(第二版) には「①新聞や雑誌で，短い評論などを載せる欄。また，その記事。罫で囲まれることが多い。②古代ギリシャ・ローマ建築の石の円柱。」とあり，他の国語辞典でもほぼ同様な説明がある。また『日本大百科全書 9』の「コラム」欄には，次のような説明がある。

> ラテン語の columna から出た「円柱」を意味することば。転じて英字新聞紙面における縦の欄を指し，さらに，一定の大きさを囲んで定型化した決まりものの記事欄を意味することが多い。日本の新聞では，常時定まっている寄稿記事，毎日同じところに連載される解説・短評欄のことをいう。『朝日新聞』の「天声人語」，『毎日新聞』の「余録」(略)，『読売新聞』の「編集手帳」などが代表的なもの。社説が社論を代表し，政治，経済，社会に属する重要事項を取り上げるものであるのに対して，コラムは，市井のできごと，自然，四季の移り変わりに至るまで素材化でき，一人の筆者が主観的な感想を述べる場合が多く，読者により親しまれるものとなっている。以下略

上記の説明によると，日本の新聞コラムは，「天声人語」などを代表とする「解説・短評欄」を指し，広範囲にわたる問題を扱うものであることが分かる。論述の姿勢は「主観的な感想を述べる場合が多」いとある点から見ると，文章の性格は，説得を主眼とする論説文，論評より，むしろ随筆に近い趣がある。

この日本語のコラムに対し，英語のコラムは性格を異にしている。上記と同

じ「コラム」の欄に，アメリカでは独立したコラムニストが「独特な取材源による情報や説得力のある意見をコラムにまとめ，各紙に提供するという方式を盛んにとって」いるとある点から，両者の性格の相違を確認することができるが，また泉子・K・メイナード（1997）の研究からも窺い知ることが出来る。メイナードは，新聞コラムの構造に関する先行研究を取り上げた中で，次のような説得を重視する構成について触れている。(127頁)

> Werlich は論評（comment）と呼ぶジャンルを「事件，事物，思考などに関して自分の持っている考え方，価値観，信条などの観点から評価，判断する」(1976：107）ものとし，この種の談話構造は三段論法による演繹法 (syllogistic Argument) に従うと述べている。その説得のストラテジーは，（略）論述（1と2），証明（3），結論（4）という要素から成っている。
>
> 1 論述：これから反対する相手の立場を簡単に提示する（英文例略）
> 2 論述：自分の立場を説明する
> 3 証明：自分の立場の論拠を示す
> 　　一般論
> 　　個別論
> 4 結論

このWerlich（1976）の例は，「新聞コラムに似たジャンルの談話構造について研究した」ものとして紹介してあり，また「三段論法による演繹法の談話ストラテジーを使ったものとして新聞の論説文がある」とも述べている。これらの点から判断すると，英語のコラムは，日本語のコラムと異なり，「説得のストラテジー」を重視する論説文に共通する構成を取っていることが分かる。

メイナードは，また日本語と英語の文章構成の相違に関しても論究し，

> ドイツ語，英語では冒頭部分に論説の要旨が出てくる演繹法的な構成が好まれるのに対し，フィンランド語ではむしろ日本語に似た帰納法的な構成も好まれることがわかった。

と述べている。そして日本語の新聞コラム―「ミニ時評」「コラム私の見方」―を調査した結果を次のように報告する。

> まず第一は，従来言われてきた通り，日本語のある種の談話構成は，結論を最後の方で出すことが確かに好まれることが分かった。その論拠として

（略）執筆者の個人的な意見を表すコメント文は冒頭段落には少なく，最終段落には比較的多いことがあげられる。(140頁)

以上，日本の新聞コラムは「結論を最後の方で出すことが」好まれる点，「説得のストラテジー」に主眼を置くよりもむしろ「主観的感想を述べる場合が多」い点から判断すると，英語のコラムとは，ストラテジー，構成，執筆者の論述の姿勢など，すべての点で相違することが分かる。

そこで日本語のコラムを分析の対象として取り上げ，次の3点を考慮しながら考察を進めていきたいと考える。

1 Werlichの4要素に相当するような要素が日本語のコラムにも観察されるのか
2 執筆者が見解を表明するまでにどのような論の展開方式をとるのか
3 日本の新聞コラム特有の文章構造が存在するのか

コラムの分析に当たっては，語句の反復を手がかりとする。また分析用の資料として，新聞コラムの代表格の一つ『朝日新聞』の「天声人語」を使用する。

朝日新聞「天声人語」 2003年4月1日～4月20日

2 語句の結束性

拙稿[注1](1994)で語彙的手段による結束性について触れているので，本稿では概略を述べておく。語彙的結束性に触れた文献には次のものがある。

池上嘉彦（1983）は，「結束性を作り出す語彙的手段としては，大きく分けて同一語句の反復と，関連語句の反復ということがある。」(22頁）と述べ，前者の典型的なものに固有名詞による反復があり，普通名詞は「その反復が同一支持であるためには，固有名詞以上のコンテクストからの支えが必要である。」(23頁）とする。後者の関連語句については，意味の「類似性」に基づく「類義語」，「上位語・下位語」と，意味の「近接性」に基づく（雲―空など）との二大別を示す。語彙的手段の対象は，固有名詞，普通名詞，類義語，上位語―下位語という語のレベルに止まり，対義語を除く，同一分類または同一外延に属するものとなっている。

市川孝（1978）は「文をつなぐ形式」の一つとして「繰り返し語句」を取り

上げ，「前後の文脈を関係づけている同一語句，同義・類義の語句」を「繰り返し語句」と呼んでいる。対象外となるのは「付属語・補助用言・形式名詞・接続詞・感動詞」と「指示語」（ただし，文脈中のことがらを指示することなしに繰り返し用いられるもの「私，彼など」は除く）である。

永野賢（1986）は，「文章全体を貫いて多用されている語ないし語群に着目し，その連鎖関係から文章構造を解明しようとすることは，方法として可能であり，また，必要でもある。」という立場を取り，「主要語句の連鎖」に注目する。「主要語句」とは，「文章の主題やモチーフに関わりの深い，いわば中核となる語句が，文章の叙述の中でくりかえし用いられたり，その類語や対義語が提示されたりして文脈を支えている連鎖の全体を文章構造の骨格としてとらえたものである。」と定義する。また「原則として，主要語句の連鎖の出発点は冒頭の文ないし段落にあり，到達点は末尾の文ないし段落にある。」と見なし，語以上のレベルを対象とする，「文章の主題やモチーフに関わりの深い」語句の反復を観察の対象とする。

林四郎（1987）は「文の承接に伴う語の意味の展開」で，語相互の形式的，意味的関係を分類整理するが，ここでは「ことばの上での関係」ばかりでなく「ことばが表す物や事の世界での関係」までを対象としている。以下整理項目を列挙する（例は略す）。

Ⅰ　ことばの上での関係
　A　ＡＢ両語が語の形式においてつながりがある。
　B　ＡＢ両語が語の意味においてつながりがある。
　　1 類義的関係
　　2 上位概念―下位概念の関係
　　3 対義的関係
　　4 ＡＢが互いにレベル変換をすると，相手と同じものごとを指すようになる。
Ⅱ　ことばが表す物や事の世界での関係
　A　物に即した関係
　　1 物の全体（A）と部分（B）
　　2 物（A）と存在場所（B）
　　3 行動の主体（A）と行動場面（B）
　B　抽象的事柄における関係

1 ある状態（A）から移行しやすい次の状態（B）
2 ある行動（A）がひき起こす当然の反応行動（B）
C 論理的認識を介して結ばれる関係
1 主体（A）とその属性（B）
2 物（A）とその行動に必要な要素（B）
3 組織上の上下関係（A，B）
4 目的を介して結ばれる対象（A）と手段（B）

ここでは語のレベルに止まらず，語と句または文の関係にまで広げて考察の対象としている。

M. A. K. ハリディ・ルカイヤ. ハサン（1997）は「第6章 語彙的結束性」で「語彙的結束性を記述するための枠組み」を次のように紹介する。

語彙的結束性のタイプ：	指示関係：
1．再叙	
（a）同一語（繰り返し）	（i）同一指示物
（b）同義語（または近似同義語）	（ii）包括的
（c）上位語	（iii）排除的
（d）一般語	（iv）無関係的
2．コロケーション	

以上，語彙的手段による結束性に関係する先行研究を概観した。大半は語のレベルを対象とするが，林説のようにレベル変換まで含めて「語の意味の展開」を観察する論文もある。また同一語句の反復の外に，関連語句の反復まで含める論文もあるが，その対象は明確に示されていない。特にコロケーションについては「特殊な種類の共起関係は，可変的で複雑である」ため，「再叙」には含まれないものとして扱われており，文脈からの解釈に委ねられている面が強い。

そこで本稿では林四郎説を参考に，語句の反復を観察することにする。

3 コラムの展開方式

本稿では紙幅の関係から「天声人語」の4月1日から4月5日までの5日分

の分析結果を考察の対象として取り上げる。(資料は20頁〜22頁参照)

3・1　4月1日

4月1日付「天声人語」の語句の反復図は〔図1〕(23頁参照)の通りである。ここでは「エープリルフール」にちなみ，歴史上の嘘にまつわるエピソードからブッシュ政権の作戦上の嘘を批判する内容となっている。

まず①文に出現する「うそ」は，途中「うそ」に関連する③「エープリルフール」⑤「大きなうそ」⑪「うそつき」などと，類義的関係の語句によって受け継がれていくが，⑭文に再び「うそ」が登場し，最後の⑱文は「こんなうそ」で終わっている。これら一連の「うそ」関連の語句は，冒頭部の①文から結尾部の⑱文に至るまで反復を繰り返しながら出現し，本コラムで中心的な話題を提示する役割を担っている。

この「うそ」が「エープリルフール」「大きなうそ」と変化するに従い，それに関連する話題が部分的に反復を繰り返すことが観察される。まず①文，②文では，「うそ」に対する見方として，①「(うそは) 泥棒の始まり」と①「(子どものうそは) 想像力の発露」と，相反する捉え方を提示する。次いで①「子ども」から②「少年 (時代)」へと「上位語—下位語」の関係で反復させ，②「(少年時代の) 正直ぶりが模範にされる」と②「(うそは) 人生を耐えるためには不可欠」と，ここでも相反する見方を対義的関係によって提示する。また①「うそ」と②「正直ぶり」，②「少年 (時代)」と②「教育者」も，各々対義的関係にある。

③文に「うそ」の類義的関係の語「エープリルフール」の出現と同時に，③「この戦時」が新出し，④「情報戦」④「現代の戦争」へ受け継がれて「戦争」関連の語句が反復する。また執筆者の警戒心を表す，④「(虚実の見分けが) 難しい」⑤「(大きなうそに) だまされている」⑥「警戒を怠ることが出来ない」など，類義的関係の語句が反復する。

⑤文で「大きなうそ」に替わると同時に，⑤「だまされている」，⑦「ばれにくい」⑦「うそぶく」⑦「(偉大な政治家に) 見せかける」⑦「ばれた」，⑧「積み重ねる」⑨「ばれた」などと，「うそ」に付随する類義的関係の語句の反復が観察される。また「大きなうそ」を特徴づける「ヒトラー」と「大本営発表」が新出する。両者はいずれも第二次世界大戦を特徴づける対象である点で，「戦争」関連の語句と同系列にある。「大きなうそ」の反復は⑨文をもって終了する。

⑩文は「ＳＦ作家」「故星新一」が新出し，⑪文から「うそつき」に替わる。⑪－1「うそつき」と⑪－1「うそつきではない」の対義的関係，⑪－1「うそつきではない」をパラフレーズした⑪－2「うそをついているとの意識がない」，⑪－2「とんでもないことを本気でそう信じている」，⑪－3「ああぬけぬけとはできない」などが反復する。

また⑪－1に新出の「政治家」は，文中での省略3回を含め計5回も同語反復を繰り返し，⑪文は「政治家」を中心とする部分的反復が顕著に認められる。なお⑪「政治家」は⑦「ヒトラー」に関連する⑦「偉大な政治家」を受けての同語反復であり，「政治家」関連の話題の引き継ぎが確認される。

⑫文に新出の「戦争当事国」「指導者たち」は，過去の指導者である⑦「ヒトラー」と⑧「大本営（発表）」とは「上位語―下位語」の関係にあるため，再び戦争関連の語句が登場する。その後，⑫「あてはまりそうな言葉」から⑬「こんな言葉」へ「言葉」の同語反復で話題は引き継がれ，⑭文で「うそ」の再登場と「真実」の新出が確認される。

⑭文から⑯文にかけては，⑭「うそ」，⑭「地球を半周する」と⑭「真実」⑭「靴を履いている間」，また⑮「うそ」⑮「足が速い」と⑯「真実」「足の方が遅すぎる」と，各々対義的関係によって，部分的反復を繰り返すことが観察される。

ところで⑭「真実」は，②「正直ぶり」と類義的関係，④「虚実の見分け」の「実」とも類似的関係にある。従って冒頭部の②「うそ」と②「正直ぶり」，さらにそれが合成した④「虚実」という対義的関係は，再び⑭⑮「うそ」と⑭⑯「真実」という対義的関係をとって登場することになる。このことは①文から始まる「うそ」関連の話題が⑯文をもって一巡したことを意味すると解せよう。

さて⑰文では「「衝撃と恐怖」作戦」「ブッシュ政権」「「愛と寛容」作戦」が新出するが，二つの「作戦」は戦争関連の語句であり，特に③「この戦時」との関連が強い語句である。また「ブッシュ政権」は新出ではあっても，③「この戦時」⑫「戦争当事国の指導者たち」に関わる人物として意識されていることは明らかである。しかも既に②「正直ぶりが模範にされ」た②「米国」の②「初代大統領ワシントン」が登場しているのであるから，それとの関係も無視できない。というのは，まず「ワシントン」も「ブッシュ」もともに「米国の大統領」の下位語であり，各々同位語の関係にあるが，重要なのは，前者が「正直ぶりが模範にされ」た初代大統領であるのに対し，後者は「誰も信じてくれ

そうにない」「こんなうそ」を言う現役大統領という図式で捉えることが出来る点である。最後に至って「ブッシュ政権」の「作戦」の「切り替え」を登場させたのは，極め付きの「うそ」の例として提示する意図があったのではないかと解するのである。

本コラムについて語句の反復表現の観察を手がかりに，その展開方式を整理すると，次のようになる。

1 話題の提示 1：「うそ」に対する見方の紹介，ワシントンの正直ぶり
2 執筆者の感想：「うそ」と「この戦時」
3 話題の提示 2：「大きなうそ」とヒトラー，大本営発表
4 話題の提示 3：「うそつき」と「政治家」―故星新一の随筆引用
5 話題の提示 4：「うそ」と「真実」の伝達速度
6 執筆者の感想：「ブッシュ政権」の政策転換に見る「こんなうそ」

ここで「話題の提示」と「執筆者の感想」と便宜的に分けたのは，叙述表現[注2]の違いを考慮したためである。語句の反復が観察される部分の叙述表現を見ると，主として客体的表現で成り立つところと，執筆者のコメントなどが入り，主体的表現（通達的表現が含まれることもある）で成り立つところがある。そこで語句の反復に叙述表現を重ね合わせて，客体的表現が中心の部分を「話題の提示」，コメントが入り主体的表現が観察される部分を「執筆者の感想」と判断することにした。ただしコラムの叙述表現に関しては，いずれ別稿で扱う予定なので，今回は「話題の提示」と「執筆者の感想」と二分するのみに止めておく。

3・2　4月2日

4月2日付「天声人語」の語句の反復図は〔図2〕（24頁参照）の通りである。これは，市町村合併の動きを取り上げ，ふるさとの地名が消えていく惜別の情を表白する内容となっている。

まず①文に「南アルプス市役所」が登場し，その構成要素である「南アルプス市」が，まず③「新しい市」と言い換えられて受け継がれ，その後④「南アルプス市」⑦「南アルプス市」⑩「南アルプス市」と反復を繰り返す。その間「南アルプス市」関連の話題が順次登場する。

まず①「南アルプス市役所」とその所属職員である②「女性」，③「別の職

員」という，「上位語」と「下位語」の関連，さらに③「誕生日」と④「誕生した」と構成要素による反復がある。

④文には「きのう」「6町村」「合併」が登場するが，そのあと⑤文で「南アルプス市」(これは顕在しないが)に戻り，その名称の語源と表記に関わる「ヨーロッパ語」「カタカナ」の登場，さらに⑥「名前」の登場で，名称が決定するまでの背景へと話題が展開していく。

ちなみに⑥「名前」は，後続で⑧「地名」「名称」，⑪「名称」「地名」，⑭「名称」⑮「全町名」「(清水の) 名」⑱「地名」⑲「地名」などと，類義的関係の語句による反復―「地名」「名称」などの同語反復も含み―を繰り返し，「南アルプス市」から⑫「清水市」，⑰「政府」関係，さらに文章の結尾部の「ふるさと」に至るまで，文章全体の話題と関わりながら反復を繰り返すことが確認できる。

さて⑥「名前」の登場によって，⑥「公募」「決められる」⑦「競り合う」などの「公募」関連の語句，次いで⑦「南アルプス市」と「最後まで競り合った」という⑦「こま野市」が登場し，そこから構成要素の⑧「巨摩（こま)」が同音で反復する。さらに⑧「巨摩（こま）」に関わる⑧「由来する」「古く（から)」などの関連語句の反復が観察される。

⑨文では再び⑥「公募」に関わる「競り合い」が出現し，そこから⑨「世代差」関連の反復が始まる。⑨「世代差」の下位語である⑩「若い世代」と⑩「高齢者層」の対義的関係，⑩「南アルプス市支持」と⑩「こまの市を支持した」の対立，地名に対する新旧のイメージの違いとしての，⑩「新鮮な印象」「宣伝効果」と⑩「歴史の広がり」の対義的関係，」など，⑨文から⑩文にかけて対義的関係による反復が顕著に観察される。

なお⑦文に始まる「こま野市」は，常に⑧「由来する」「古く（から)」，そして⑩「歴史の広がり」など，「歴史」に関わる類義的関係の語句と一緒に出現するが，⑩文をもって反復が終了する。また先述したように「南アルプス市」の反復も⑩文で終了する。

⑪文の「合併前」は，④「合併」を受けたもので，構成要素による反復であるし，⑪「白根」「櫛形」「若草」の地名は，それぞれ④「6町村」とは「上位語―下位語」の関係にある。従って④文の「6町村」と「合併」は，⑪文に至って初めて反復に関わることになる。これは④文で提示した「6町村」「合併」に関わる話題が一巡し，再び⑪文に戻ってきたことを意味しており，事実⑪「白根」「櫛形」「若草」をもって，④「6町村」に関わる語句の反復は終了する。

ただし⑪文に初出の「消えていく」は，最後の一文⑳「消えていくもの」まで反復を繰り返していく出発点になっている。特に注意されるのは，⑪文から「地名」と「消えていく」が初めてセットで出現する点である。この⑪文は「南アルプス市」関連の反復が終了するところであるから，「名称」「地名」「消えていく」は，①文から⑪文までの話題の最後に出現することが確認できる。

⑫文には再び「きのう」が登場し，④「きのう」からの同語反復となっているし，⑫「合併した」も④「合併」⑪「合併前」からの反復である。このように先行の叙述を受け継ぎながら，⑫「静岡市」と⑫「清水市」とが新出する。⑫文の「清水市」は⑬文で構成要素の「清水」が，⑬「清水の次郎長」⑬「サッカーの清水」⑮「旧清水市」「清水の名」と，順次同語反復を繰り返す。また「清水」に関わる⑬「港町」の関連語句も観察される。この「清水」関連の語句は，⑫文から⑮文まで集中的に出現し，部分的まとまりを形成するが，ここでも⑭「清水の名称が消えることに抵抗が強かった」とあって，「名称」「消える」はセットで出現する。

「清水」の反復が終了すると，再び⑯「合併（の動き）」⑰「合併」が登場する。そして「消える」と対義的関係にある⑯「加速している」⑰「（合併を）促している」の出現が確認される。それらと連動して⑰「政府」⑱「行政上」「財政上」，そして「財政」に関わる⑰「優遇措置」⑱「利便」など，一連の政府関係の事例が部分的に反復する。これらの反復の最後に，やはり⑱「地名」「消えていく」がセットで出現するのが観察される。

「政府」関係の反復の終了とともに，⑲「ふるさと」「望郷」「ふるさと」などの同語反復，類義的関係による反復があるが，ここでも⑲「地名」「消える」とセットで出現している。

以上のように，「南アルプス市」に始まり，「清水市」「政府」「ふるさと」と，部分的反復によって話題を展開していくが，その間に一貫して出現するのは「名称」または「地名」と「消える」であることが分かる。

さて最後の⑳文で，⑳「新しくものごとが始まる」と「4月」の新出語句の登場によって，それまでの合併に関わる話題の転換が図られる。しかし同時に「新しくものごとが始まる」は③「新しい市」「誕生日」と呼応するし，「4月」は④「きのう」⑫「きのう」を含む上位語の関係にある。また「新しくものごとが始まる」には，合併による新市の誕生も含まれるので，「南アルプス市」と「静岡市」の話題も関係する。

このように見ると，執筆者は最後に，それまでの叙述内容，すなわち市町村

合併により「きのう」（4月1日）誕生した「南アルプス市」と「静岡市」の二つの話題を踏まえ，それらを上位概念を表す語句によって⑳「新しくものごとが始まる4月」と捉え直すことで，レベル変換による反復を行い，話題を括りまとめていると解せる。しかも⑪文から始まる，「名称（地名）」と「消える」を，やはりレベル変換によって⑳「消えていくもの」と捉え直して，それまでの反復を終了させる形を取っている。また⑳「惜別」は，執筆者の心情の現れであり，⑱「残念なことだ」⑲「寂しい」からの類義的関係の語句による反復が「惜別」という漢語をもって終了する。

本コラムについて語句の反復表現の観察を手がかりに，その展開方式を整理すると，次のようになる。

1 話題の提示1　その1：「南アルプス市」の誕生
　　その2：名前決定の経緯
　　その3：競り合いと世代差
　　その4：地名が消える
2 話題の提示2　その1：「静岡市」と「清水市」の合併
　　その2：「清水市」の名称が消えることへの抵抗
3 話題の提示3：市町村合併の動きと政府の優遇措置
4 話題の提示4：ふるさとの地名が消える
5 執筆者の感想：ものごとの始まりと消えていくものへの惜別

3・3　4月3日

4月3日付「天声人語」の語句の反復図は〔図3〕（25頁参照）の通りである。これは，ウィーンの美術史美術館所蔵のブリューゲルの「バベルの塔」からイラク戦争にみる人間の愚の繰り返しに思いを馳せる内容である。

①文では「ウィーン」「美術史美術館」と「ブリューゲル」作「バベルの塔」の「絵」から始まり，②文でその「絵」の印象に移る。「異様な力」「魅力」とあり，さらに③「魔力」と印象を表す類義的関係の語句による反復が観察される。

④文では再び「この絵」に戻り，絵の典拠である「旧約聖書の物語」に話題が移行する。①「バベルの塔」は⑤文で「天まで届く塔」とパラフレーズされて受け継がれ，「物語」の内容が，「人間」「神」「建築」に関わる話題として語られる。「人間」関係では，⑤「つくろうとする」「試み」⑥「同じ言語」「話

す」「言葉」⑦「傲慢さ」などと，人間の行為，言葉，態度などの関連語句による反復がある。また「神」関係では，⑤「神」「怒りにふれる」，⑥「神」「混乱させる」「通じないようにする」「断念させる」，⑦「戒める」と，「神」と「神の行為」を表す語句による反復が観察される。「建築」関係では⑤「(塔を) つくろう」と⑥「建設」の類義的関係がある。「旧約の物語」に関わる反復は⑦文で終了する。

次いで⑧文で再び「バベルの塔」に戻り，その「モデル」に話題が移る。「モデル」に関わる「古代都市」「バビロン」「建築物」「ジグラット」が新出するが，このうち「建築物」は，「建築」に関わる⑤「(塔を) つくろう」と⑥「建設」からの反復と解せる。

⑧「ジクラット」は⑨「ジクラット」と同語反復で受け継がれ，⑨文では「古代ギリシャ」「歴史家」「ヘロドトス」が新出する。「古代ギリシャ」は⑧「古代都市」の下位語にあたり，「ギリシャ」と「歴史家ヘロドトス」とは関連語句となる。⑩文では⑧「建築物」の下位語にあたる⑩「空中庭園」が新出し，⑩「バビロン」の同語反復が観察される。また⑩「バビロン」から⑩「繁栄の象徴」が新出するが，これは後続の⑯「近代文明の行き着く先の象徴」と対義的関係になる。「バビロン」の「建築物」関連の反復はここで終了する。

⑪文では「バビロン」の「遺跡」に話題が移る。「遺跡」「バグダット」「南90キロほどの地」の新出語があるが，「遺跡」は⑫「遺跡」と同語反復で受け継がれ，「遺跡」に関わる⑫「発掘」，⑫「都市の再現」などと反復する。また「バグダット」は⑬「現在激しい戦闘が行われている地域」とパラフレーズされて受け継がれ，⑮「この戦争」と捉え直されて反復することが観察される。そして⑮文で再び，「バベルの塔」が復活する。ここでは⑮「この戦争」を⑮「愚」「繰り返す」と捉えるが，これは④文から⑦文までの「旧約の物語」の内容にある⑦「(人間の) 傲慢さ」を，⑮「愚」として捉え直したと解せる。

⑯文で，再び①文の「ウィーンの美術史美術館」に所蔵されている「ブリューゲル」の「バベルの塔」の「絵」に戻る。そして「作家」の新出語により，話題は「中野孝次」さんの「印象」記に移る。まず⑯「バベルの塔」関係は，⑯「あの塔」と受け継がれる。また冒頭で「絵」に関する印象が②「異様な力」「魅力」③「魔力」と描写されていたのを受けて，「中野孝次さん」の印象を⑯「近代文明の行き着く先の象徴」⑰「悪夢」「無気味な」「悪魔的な企て」「あるべからざるなにか」と，悪夢に関わる類義的関係の語句で反復させている。

先述したように，⑯「近代文明の行き着く先の象徴」は，⑧「バビロンの繁

栄の象徴」と対義的関係に立つと解せるものである。⑧文は，「バベルの塔」の「モデル」である「古代都市バビロンの壮麗な建築物ジグラット」が「繁栄の象徴」と「報告」されたものであり，⑯文は「ブリューゲル」の「バベルの塔」の「絵」を「近代文明の行き着く先の象徴」と「中野孝次さん」が「感じた」のである。「バベルの塔」に対する「古代」と「近代」，「歴史家」と「作家」の見方の違いは，一方が「繁栄の象徴」，他方が「悪夢」とも言うべき「近代文明の行き着く先の象徴」として表現される。「中野孝治さん」の登場で，古代と近代が対比的に捉えられると同時に，再び「ブリューゲル」の「バベルの塔」の「絵」に話題が戻っていき，「バベルの塔」に関わる反復は⑰文をもって終了する。

最後の⑱文では「兵器」「殺し合い」「戦争の本質」など一連の「戦争」関連の語句の反復があり，それは⑲文の「イラクの戦場」に受け継がれていく。「戦争」関連の語句は⑬「激しい戦闘」と⑮「この戦争」からの受け継がれており，⑲「イラク」は⑧「バビロン」に近接する⑪「バグダッド」と対応する。戦争に関わる語句の反復によって，結尾部を終了させる形となっている。

本コラムについて，語句の反復を手がかりに，その展開方式を整理すると，次のようになる。

1 話題の提示　：「ブリューゲル」の「バベルの塔」の「絵」とその印象
2 話題の提示　：バベルの塔の物語にみる人間の傲慢さ
3 話題の提示　：バベルの塔のモデルである古代都市バビロンのジグラット
4 話題の提示　：バビロンの遺跡に近いバグダットでの戦争に見るバベルの塔の愚
5 話題の提示　：中野孝次と「絵」の印象
6 執筆者の感想：古代から変わらぬ戦争の本質を思わすイラクの戦場

3・4　4月4日

4月4日付「天声人語」の語句の反復図は〔図4〕(26頁参照) の通りである。これは人間同士の戦争とウイルスによってもたらされる病との闘いを対比させ，今回の新型肺炎の流行は，戦争で血を流し合っている人類に対するウイルスからの警告かもしれないと見る内容である。

まず①文では「人間同士」「戦争をする」「謎」「ウイルス」「人間」「襲いかかる」と新出語句の登場により，「人間同士」が行う「戦争」と，「人間」と「ウ

イルス」との闘いという図式が示される。特に「ウイルス」関連の「インフルエンザ」は文章全体に渡って出現し，コラムの中核をなす語句となっている。

②文では「謎のウイルス」に関連する「重症急性呼吸器症候群（SARS）」「新型肺炎」という病名が出現する。この二つの病名は専門用語と通称との関係にある。③文では「新型肺炎」の「発生地」である「中国」「香港」「世界各地」と，「新型肺炎」に罹った「患者」が登場する。さらに④文では「新型肺炎」の病状を表す「症状」「インフルエンザ」が登場する。このように①「ウイルス」に関わる病名，発生地，患者，病状へと受け継がれ，「謎のウイルス」関連の語句の反復は終了する。

⑤文で，①文の「人間」「戦争」が再登場し，「病との闘い」「歴史」が新出する。⑤「病との闘い」は，①文から④文までの「謎のウイルスが人間に襲いかかり」，「新型肺炎」の「患者が」「世界各地」に「広がっている」状況を踏まえており，レベル変換によって話題の転換を図っていると解せる。また「歴史」も「戦争の歴史」と組み合わせることで，「戦争」に関わる「歴史」へと話題を転換させている。

まず⑥文で⑤「歴史」の下位語である「近代史」が新出し，さらに「近代史」の下位語「第一次世界大戦中」「1918年」へと進む。「歴史」関係の語句は上位語と下位語の関係をとりながら，「第一次世界大戦中」に焦点が絞られる。また⑥文に「最悪の記録」が新出し，⑦文では下位項目に当たる⑦「死者の数」，さらに下位項目の⑦「2千万人」と⑧「億単位」へ進み，⑥「最悪の記録」に関わる部分的反復が観察されるが，これは「発生地」の「世界」と対応する。

なお④文に新出の「インフルエンザ」は⑥文で「インフルエンザ」と同語反復して，情報が引き継がれるが，さらに⑧文の著書名『インフルエンザウイルスを追う』まで同語反復で取り込まれている。この書名では①「ウイルス」も同語反復によって，再登場する。

⑧文の書名は，⑨文で「同書」と受け継がれ，先行叙述内容からの連続性を維持するとともに，⑨文の「当初」は，⑥「第一次世界大戦中」⑥「1918年」を指しているため，引き続き「第一次世界大戦中」の出来事の反復となっている。ただし「発生地」が「世界」から下位語の「アメリカ」に代わり，「アメリカ」と対応する形で，⑨「新兵器」⑩「潜水艦」⑩「Uボート」⑩「ドイツ兵」などの戦争関連の語句が反復する。さらに⑪「前線」⑫「戦死者」⑫「部隊」⑬「報道管制」など，戦争関連の語句の反復がある。そして⑥文に始まる「第一次世界大戦中」に関わる語句の反復は⑬文をもって終了する。また⑤文

に始まる「歴史」も⑬「歴史の闇」をもって終了する。

⑭「謎」は①「謎」が同語反復による再登場する。また⑮文に新出の「発生地」とそれに関わる⑮「アメリカ説」⑮「中国南部説」などは，②「新型肺炎」の発生地である③「中国」と⑥「第一次世界大戦中」に「インフルエンザ」で悩まされた⑨「アメリカ」を，各々構成要素として含む形での反復と解せる。この「中国」と「アメリカ」に関する反復は⑮文をもって終了する。

⑯文では，⑥「第一次世界大戦中」を「あのころ」と捉え直して話題の切り替えを図っている。そして⑯文以降は，⑯「医学」と⑯「進歩する」に対し⑰「新型肺炎」と⑰「油断できない」⑰「恐れることはない」，さらに⑱「医学」⑱「進歩する」に対し⑱「新種の病気」と⑱「裏をかく」⑱「出てくる」というように，医学の進歩と新種の病気との闘いが対比的に提示されていることが観察される。

⑳文では再び著書名が「先の書」として登場し，⑳「インフルエンザ」⑳「軽視される」と「新しい疫病」「(人の命を) 奪う」「力を集める」とが対比して提示される。

このように⑯文から⑳文にかけては，医学の進歩と新種の病気との闘い，インフルエンザの軽視と新しい疫病の力の結集という，対比による部分的反復が観察される。

㉑文では，①「人間同士」「戦争をする」，⑤「人間」「戦争（の歴史)」とを対応させる形で「人類」「戦争」が登場する。しかもまた①「謎のウイルス」「襲いかかる」と対応する形で「(ウイルス)」「警告」が登場する。そして⑤「病との闘い」(①～④の内容の捉え直し) ⑲「病との闘い」と同語反復されてきた語句が，最後に㉑「大事な闘い」と捉え直されている。このように㉑文に出現する語句は，冒頭部からの反復であって，冒頭部と結尾部は語句において呼応する形となっている。ただし呼応といっても，「人間」と「人類」，「病との闘い」と「大事な闘い」とあって，両者は次元を異にする。執筆者は恐らく個別の事象として扱ってきた問題を結尾部で普遍的問題として捉え直すことを意図したのではないかと思える。結尾部は「警告かもしれない」と断定を避け，推量形で終えている。

本コラムの展開方式を整理すると，次のようになる。

話題の提示１：人間同士の戦争と謎のウイルスによる患者の広がり
話題の提示２：第一次世界大戦中のインフルエンザによる最悪の記録

話題の提示３：第一次世界大戦中のアメリカ部隊でのインフルエンザの被害
話題の提示４：新種の病気と医学の進歩との関わり
執筆者の感想：戦争をしている人類に対する謎のウイルスからの警告

3・5　4月5日

4月5日付「天声人語」の語句の反復図は〔図5〕(27頁参照）の通りである。ここでは桜の散り始めた光景から宮沢賢治の『春と修羅』の連想，さらに山田太一編『生きるかなしみ』の戦後の復員事務にまつわる話，そしてイラク戦争を思い遣ってのことと推測される，「人の命」が「散らされる」「修羅の四月」と締めくくる内容となっている。

まず①文では，「夕暮れ時」「いつもの角」「曲がる」「白いもの」「たちのぼる」などの語句が新出する。このうち「いつもの角」は②「こんな所」，「曲がる」は②「立ち止まる」と受け継がれる。「白いもの」は②「桜」として出現するが，「白いもの」が「桜」を表すのは提喩（比喩の一つ）に相当すると解せるので，「白いもの（上位語）」から「桜（下位語）」への反復となっている。

③文では，②「こんな所」（下位語）から話題が③「東京」（上位語）へと移り，「桜」の状態を③「散り始める」④「(次々に）枝を離れる」と類義的関係語句で反復する。「桜」に関する語句の反復は④文をもって終了する。

また④文に「修羅」「言葉」が新出するが，それが⑤文で宮沢賢治の詩の一文が紹介され，そこに⑤「修羅」の反復と⑤「四月の底」の新出語が観察される。

⑥文では「宮沢賢治」と「春と修羅」の出現により，④文からの「修羅」の同語反復，⑤「四月の底」と⑥「春」との下位語と上位語での反復が観察され，これらの反復は⑥文をもって中断する。同時に⑥文に「脚本家」「山田太一さん」「編む」「『生きるかなしみ』」の新出語句があり，⑦文では⑥「編む」が⑦「集められる」⑦「十数編」と類義的関係の語句，⑥「『生きるかなしみ』」は，⑦「生きていること」⑦「どんな生」と⑦「かなしみ」と受け継がれ反復するが，これらの反復はここで中断する。同時に⑦文に新出の「作家」「夢野久作」「杉山龍丸」「戦後」「復員事務」「一文」の中，「復員事務」が⑧「苦しい仕事」とパラフレーズして反復する。それと同時に「苦しい仕事」の内容に関わる語句の反復が⑧文から⑫文まで部分的反復を繰り返す。まず，家族に関わる⑧「留守家族」⑧「息子さん」⑧「御主人」，そして⑨文から「小学二年の女の子」の家族として⑨「父親」⑩「あなたのお父さん」⑪「少女」⑫「家」⑫「母」

⑫「2人の妹」⑫「病にふせる祖父母」などの反復が観察される。またその家族に関わる出来事として⑧「亡くなる」⑧「死ぬ」⑧「死ぬ」⑧「死ぬ」⑨「戦死する」⑫「(母も) ない」と,「なくなる」ことに関わる語句の反復が連動する。これらの反復は⑫文をもって終了する。

⑬文に再び「山田さん」が登場し,⑦「戦後」⑩「戦死する」と関連する⑬「戦争」の出現,また⑦「一文」を受ける⑬「こうした記録」の反復がある。この⑬文をもって「山田さん」に関する反復は終了する。

⑭文では「人の命」「散らされる」「修羅」「四月」と出現するが,「人の命」が「散らされる」は,③「(桜が) 散り始めた」と対応しており,「桜」は時が来れば自然に「散り始めた」が,「人の命」は人為的に「散らされる」と対義的関係になっていることが読みとれる。また④「修羅」⑤「修羅」⑥「春と修羅」と続く「修羅」が⑭文で再び「修羅」として出現し,さらに⑤「四月の底」が⑭「4月」として反復する。続く⑮文の「生」と「生きるかなしみ」は,まず前者が⑦「生きていること」⑦「どんな生」を受けており,さらに⑧文以降の「亡くなる」関連と類義的関係に立っている。また後者は⑥『生きるかなしみ』の書名そのままが同語反復する形となっている。

本コラムについて語句の反復表現の観察を手がかりに,その展開方式を整理すると,次のようになる。

1 話題の提示1:桜の散る様から響いてくる「修羅」という言葉
2 話題の提示2:「春と修羅」も収めた山田太一編『生きるかなしみ』
3 話題の提示3:『生きるかなしみ』に収められた戦後の復員事務の一文
4 話題の提示4:家族に戦死を伝える復員事務の苦しい仕事
5 話題の提示5:山田さんの戦争を推し進める人への嫌悪感
6 話題の提示6:「生あればこそ生きるかなしみもある」という「修羅の4月」

4 まとめ

「天声人語」の5日分を分析対象として取り上げ,語句の反復を手がかりに,その展開方式を観察してきた。この5日分の外に対象とした20日分の語句の反復図を作成したが,そのいずれも,ここで紹介した5日分のいずれかに該当する結果が観察された。いずれのコラムも「話題の提示」に中心が置かれており,冒頭部で提示された語句が部分的反復を繰り返しながら展開し,最後に冒頭部

と結尾部が呼応する形式をとり，そこで多くの場合，執筆者が感想を述べて終えるという展開方式である。

考察を進めるに当たって考慮した3点について，最後に整理しておきたい。

1 Werlichの4要素に相当するような要素が日本語のコラムにも観察されるのか
2 執筆者が見解を表明するまでにどのような論の展開方式をとるのか
3 日本の新聞コラム特有の文章構造が存在するのか

まず1であるが，Werlichの論評（comment）では，説得のストラテジーとして，論述（1と2），証明（3），結論（4）という要素を基本とするが，日本の新聞コラム，「天声人語」の場合は，説得のストラテジーは観察されず，話題を提示することに主眼が置かれていることが判明した。その話題も，アメリカによるイラク攻撃が執筆者の目下の関心事であるためか，エープリルフール，ブリューゲルの「バベルの塔」，謎のウイルス，桜の散る情景など，様々の話題を取り上げながら，そこでは必ず戦争を絡ませており（ただし「市町村合併」は除く），最後には戦争に関わることで締めくくることが確認された。しかし論を展開する過程では，何を批判の対象にするのか，どういう立場で論を展開しようとするのか，読者に知らせる方法は取っていない。ただ関連する話題を順次提示しながら，最後に執筆者の問題意識が明らかとなる仕組みとなっている。ただし最後に問題意識が明らかとなり，批判の対象が明示されたとしても，表立って攻撃するようなことはせず，感想を述べるか，心情を吐露するのみで止めており，自己の見解の妥当性を論拠を示して説得する姿勢は一切認められなかった。

Werlichの論評（comment）に倣って要素となるものを上げれば，「話題1」「話題2」「話題3」「感想」が基本的な要素ということになるであろう。話題相互の関連でコラムが展開していく方式を考慮すると，提示する「話題」に価値が置かれているように思う。

次に2であるが，論の展開方式は，語句の反復を観察することで，明らかになった。本稿で紹介した5日分では，展開方式はそれぞれ異なるが，基本的には，冒頭部に出現する語句が関連語句などによって部分的反復を繰り返し，結尾部に至って再び冒頭部の語句に戻り，コラムが完結するという方式として確認できる。話題を一巡させて初めて，執筆者が問題意識を明示し，感想を述べるという構成が，「天声人語」の特徴と言えるようである。

最後に3であるが，日本の新聞コラムは，Werlichが上げる論評(comment)の構造とは対照的であり，頭括式構造を取るコラムは20日分の中一例もなく，すべて尾括式構造を取ることが確認できた。冒頭部は，執筆者が問題を提示したり，自己の立場を表明したりすることはなく，話を進めるきっかけとして，一つの話題が提示されるのみである。そして執筆者の問題意識は結尾部に至って明かされることが多く，感想を述べたり，心情を吐露したりしてコラムが終わるのが一般である。しかし中には「生あればこそ，生きるかなしみもある。」などと，話題を提示するのみで，結論らしい結論が確認されないものもある。「日本の新聞コラム特有の文章構造」に関しては，今後検討する余地が多分にあると考えている。

最後に，日本の新聞コラムは「結論を最後の方で出すことが」好まれ，「説得」を目的とするより「主観的感想を述べる場合が多」いと言われるが，本稿でコラムの展開を検討した結果，従来指摘されている点を再確認することが出来たように思う。しかしそればかりでなく，語句の反復を手がかりに分析することで，話題の展開方式を視覚的に捉えることが出来，語句の反復による話題のまとまりと，話題相互の関連性などを確認することが出来た。また反復図を作成する過程で，それまで気づかなかった語句が対義的関係などで反復に関わっており，批判の対象を明確にする上で執筆者が前もって伏線を敷いておいた重要な語句であることが判明した際は，文章全体の中でそれぞれの語句が意味ある存在として有機的に関わっていることに改めて気づかされたように思う。文章構造の解明を目指して，本稿では語句の反復図を作成することに中心を置いたが，今後は，語句相互の関係性を判定する際の基準を明確にして，日本の新聞コラムに観察される展開方式から，コラムの構造を類型化することを目指したいと考えている。

〔資料〕

04月01日付　《天声人語》

①「うそは泥棒の始まり」というしつけもあるが，子どものうそは想像力の発露だと肯定する人もいる。②米国でも初代大統領ワシントンの少年時代の正直ぶりが模範にされる一方「うそは人生を耐えるためには不可欠」と教育者が説いたりする。

③エープリルフール，といってもこの戦時ではうそや冗談をいう気力がわかない。④情報戦が重要な役割を占める現代の戦争では，そもそも虚実の見分けが難しい。⑤ひょっとしたら大きなうそにだまされているのではないか。⑥警戒を怠ることができない。

⑦「大きなうそほどばれにくい」とうそぶいたのはヒトラーだが，自分を偉大な政治家に見せかけた大きなうそも，結局はばれた。⑧わが国の大本営発表のようにうそを積み重ねたあげく崩壊した例もある。⑨大きなうそはばれたときの反動も大きい。

⑩ＳＦ作家の故星新一がこんなことを書いている。⑪「うそつきというと政治家と結びつける人があるが，……政治家はうそつきではない。なぜなら，うそをついているとの意識がなく，とんでもないことを本気でそう信じているらしいからである。そうでなかったらああぬけぬけとはできない」(『日本の名随筆41』作品社)。

⑫戦争当事国の指導者たちにあてはまりそうな言葉だ。⑬こんな言葉もある。⑭「真実が靴を履いている間に，うそは地球を半周する」。⑮うそは足が速い。⑯いや，真実の足の方が遅すぎるのかもしれない。

⑰「衝撃と恐怖」作戦の失敗を認めたブッシュ政権が「愛と寛容」作戦に切り替えた。⑱こんなうそは誰も信じてくれそうにない。

04月02日付　《天声人語》

①「はい，南アルプス市役所です」。②電話口で女性が答えた。③別の職員は「あわただしい一日でした」と新しい市の誕生日を振り返っていた。④きのう６町村の合併で誕生した山梨県の南アルプス市である。⑤ヨーロッパ語をつかって，カタカナで表記する珍しい例だ。

⑥名前は公募をもとに決められた。⑦「南アルプス市」と最後まで競り合ったのは「こま野市」だった。⑧朝鮮半島に由来するとの説もある古くからの地名「巨摩(こま)」を生かした名称である。

⑨競り合いには，はっきり世代差が表れたそうだ。⑩新鮮な印象や宣伝効果などをねらう若い世代は「南アルプス市」支持で，歴史の広がりを残そうとする高齢者層は「こま野市」を支持した。⑪合併前の白根，櫛形，若草などの味わい深い名称も地名としては消えていく。

⑫やはりきのう静岡市と合併した清水市の場合は，さらに深刻だった。⑬「清水の次郎長」で多くの人に知られ，近年は「サッカーの清水」として全国に名をはせた港町である。⑭名称が消えることに抵抗が強かった。⑮旧清水市の全町名に清水の名を冠するという苦肉の策で乗り切った。

⑯市町村合併の動きが加速している。⑰政府が期限を切って優遇措置を掲げ，合併を促しているからだ。⑱行政上や財政上の利便はあるだろうが，そのために歴史を体現する地名が消えていくとすると，残念なことだ。⑲「ふるさとは遠きにあり

て思ふもの」という望郷の身からすればふるさとの地名が消えるのは何とも寂しいことだろう。

⑳新しくものごとが始まる4月，消えていくものへの惜別も，また。

04月03日付 《天声人語》

①ウィーンの美術史美術館で，多くの人が立ち止まって見入る絵の一つがブリューゲルの「バベルの塔」だ。②異様な力でもって引き寄せる魅力がある。③「魔力」といった方がいいかもしれない。

④この絵の元になった旧約聖書の物語は，ご存じの方が多いだろう。⑤天にまで届く塔をつくろうとした試みが神の怒りにふれる。⑥神は同じ言語を話していた人々の言葉を混乱させ，互いに通じないようにして建設を断念させた。⑦人間の傲慢（ごうまん）さを戒めた。

⑧この「バベルの塔」のモデルが古代都市バビロンの壮麗な建築物ジグラットである。⑨ジグラットについては古代ギリシャの歴史家ヘロドトスの報告が有名だ。⑩世界七不思議の一つとされた空中庭園とともに，バビロンの繁栄の象徴として当時の世界に知れ渡っていた。

⑪バビロンの遺跡は，バグダッドから南90キロほどの地にある。⑫これまで遺跡の発掘や都市の再現が試みられてきた。⑬現在激しい戦闘が行われている地域からそう遠くないだろう。⑭そして思う。⑮この戦争が「バベルの塔」の愚を繰り返していはしないか。

⑯ブリューゲルの「バベルの塔」の前に立った作家の中野孝次さんは，あの塔が近代文明の行き着く先の象徴とも感じたようだ。⑰「悪夢。たしかにそうだ」とその印象を記し「無気味な，悪魔的な企て，あるべからざるなにか」とも（『ブリューゲルへの旅』河出書房新社）。

⑱最先端の兵器を使ったとしても，人間同士の殺し合いという古代からの戦争の本質に変わりはない。⑲イラクの戦場からの報告に，そんな思いが募る日々だ。

04月04日付 《天声人語》

①人間同士が戦争をしているときに，謎のウイルスが人間に襲いかかっている。②重症急性呼吸器症候群（SARS）といわれる新型肺炎だ。③中国や香港を中心に，世界各地に患者が広がっている。④症状はインフルエンザに似ているらしい。

⑤人間と病との闘いはそれこそ戦争の歴史と同じように古い。⑥近代史でいえば，最悪の記録を残したのは第一次世界大戦中，1918年のインフルエンザだろう。⑦正確な死者の数はわからないが，少なくとも世界で2千万人を超えた。⑧億単位だったという説もある（ジーナ・コラータ著『インフルエンザウイルスを追う』ニュートンプレス）。

⑨同書によれば，当初アメリカでは「新兵器に違いないというううわさが流れた」。⑩潜水艦のUボートで忍び込んだドイツ兵の仕業だ，などと。

⑪前線でも悩まされた。⑫インフルエンザによる死者が戦死者を上回った部隊も少なくない。⑬しかし報道管制もあって，歴史の闇に消えた部分が多い。⑭謎が多々残されたままだ。⑮発生地についてもアメリカ説，中国南部説などいろいろらしい。

⑯あのころから医学は格段に進歩した。⑰新型肺炎についても油断はできないが，

過剰に恐れることはないかもしれない。⑱しかし，どれだけ医学が進歩しても，その裏をかくように新種の病気が出てくる。⑲病との闘いは続く。⑳先の書もインフルエンザは軽視されるようになったが「その陰では，新しい疫病が人の命を奪おうと力を集めているだろう」と。

㉑戦争で血を流し合っている人類へ「もっと大事な闘いがある」との警告かもしれない。

04月05日付 《天声人語》

①夕暮れ時，いつもの角を曲がろうとして，ぼんやりと白いものがたちのぼるのに気づく。②ああ，こんな所にも桜があったのかと立ち止まる。

③東京では散り始めた。④次々に枝を離れる様を見ていると，いつの年にも増して，修羅という言葉が響いてくる。⑤「まことのことばはうしなはれ／雲はちぎれてそらをとぶ／ああかがやきの四月の底を／はぎしり燃えてゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」。

⑥この宮沢賢治の「春と修羅」の一節も収めて，脚本家・山田太一さんが編んだ『生きるかなしみ』（ちくま文庫）を開く。⑦「人が生きていること，それだけでどんな生にもかなしみがつきまとう」との視点で集められた十数編の中に，作家夢野久作の長男，杉山龍丸が，戦後の復員事務を顧みた一文がある。

⑧連日訪ねてくる留守家族に「貴方の息子さんは，御主人は亡くなった，死んだ，死んだ，死んだと伝える苦しい仕事」だ。⑨ある日，小学2年の女の子が父親のことを聞きに来る。⑩やっとの思いで「あなたのお父さんは，戦死しておられるのです」と伝える。⑪少女は涙をこらえ，下くちびるを血がでるようにかみしめ，帰ってゆく。⑫家には既に母もなく，2人の妹と，病にふせる祖父母が待つ。

⑬山田さんは「ただ闇雲に戦争なきをよしとする考えのグロテスクを知らないわけではない。（略）しかし，こうした記録を前にして，なお平然として沈黙を知らぬ人に，ひかえめにいっても私は嫌悪を抱く」と記す。

⑭人の命までが散らされる，修羅の4月。⑮生あればこそ，生きるかなしみもある。

図1	うそ	うそ関連	子ども	米国	大統領	大統領の行為	真実	真実関連	戦争関連	コメント	政治家	作家	言葉
①	うそ	泥棒の始まり											
	うそ	想像力の発露	子ども										
②	うそ	人生…不可欠	少年時代	米国	初代大統領		正直ぶり	模範にされる					
			教育者		ワシントン								
③	エープリルフール								この戦時				
	うそ												
④	虚(実)						(虚)実		情報戦	見分けが難しい			
									現代の戦争				
⑤	大きなうそ	だまされる											
⑥										警戒を怠れない			
⑦	大きなうそ	ばれにくい							ヒトラー		偉大な政治家		
	大きなうそ	うそぶく							自分				
		みせかける											
		ばれた											
⑧	うそ	積み重ねる							わが国				
									大本営発表				
⑨	大きなうそ	ばれた								反動が大きい			
⑩												ＳＦ作家	書いている
												故星新一	
⑪	うそつき										政治家		
	うそつき										政治家		
	うそをついている										(政治家)		
	とんでも…信じて										(政治家)		
	ぬけぬけとは…										(政治家)		
⑫									戦争当事国				言葉
⑬													こんな言葉
⑭	うそ	地球を半周する					真実	靴を履いている					
⑮	うそ	足が速い											
⑯							真実	足の方が遅すぎる					
⑰				(米国)	ブッシュ政権	失敗を認めた			「衝撃…」作戦				
						切り替えた			「愛…」作戦				
⑱	こんなうそ									信じてくれ…ない			

図2	南ア市	順	誕生	時	合併	市町村	言葉	名称	公募関連	こま野市	世代	歴史	印象	姓	消える	静岡・清水	政府関連	ふるさと	心情
①	南ア市役所																		
②		姓																	
③	新しい市	順	誕生日	一日															
④	南ア市		誕生した	きのう	合併	6町村													
⑤	(南ア市)						ヨーロッパ語												
							カタカナ												
⑥	(南ア市)							名前	公募										
									決められる										
⑦	南ア市								競り合う	こま野市									
⑧								地名		巨摩(こま)		由来する							
								名称				古く							
⑨									競り合い		世代差								
⑩	南ア市										若い世代		新鮮な印象	姓					
													宣伝効果						
										こま野市	高齢者層	歴史		姓					
⑪					合併前	"白根,など"		名称				味わい深い			消えていく				
								地名											
⑫				きのう	合併した											静岡市			
																清水市			
⑬				近年				名								清水次郎長			
																サッカー清水			
																港町			
⑭								名称							消える				
⑮								全町名								旧清水市			
								名								清水			
⑯					(市町村) 合併	市町村(合併)									▲加速する				
⑰					合併										▲促す		政府		
																	優遇措置		
⑱								地名				歴史			消えていく		行政上		残念
																	財政上		
																	利便		
⑲								地名							消える			ふるさと	寂しい
																		望郷	
																		ふるさと	
⑳			新しく…	4月											消えていくもの				惜別
			始まる																

図3	美術史美術館	絵	絵の印象	バベルの塔	人の行為	神	神の行為	言葉	建築	文明	バビロン	ヘロドトス	報告	遺跡	戦争	思い	中野孝次
①	ウィーン	絵		「バの塔」													
	美術史美術館	ブリューゲル															
②			異様な力														
			魅力														
③			魔力														
④		この絵		旧約の物語													
⑤				天…届く塔	試み	神	怒り										
⑥						神	混乱させる	同じ言語	建設								
							通じない	話す									
							断念させる	言葉									
⑦					傲慢さ	（神）	戒める										
⑧				バベルの塔					モデル	古代都市	バビロン						
									建築物								
									ジグラット								
⑨									ジグラット	古代ギリシャ		歴史家	報告				
												ヘロドトス					
⑩									空中庭園	当時の世界	バビロン						
									繁栄の象徴								
⑪											バビロン			遺跡	バグダッド		
											南90キロの地						
⑫					試みられる					都市の再現				遺跡			
⑬											記録				記録		
⑭																思う	
⑮				バベルの塔	愚										この戦争		
					繰り返す												
⑯		ブリューゲル		「バの塔」					行…の象徴	近代文明							作家
				あの塔													中野孝次
⑰		『ブへの旅』	悪夢														
			無気味な														
			悪魔的な企て														
			ある…なにか														
⑱										古代					最先端の兵器		
															殺し合い		
															戦争の本質		
⑲													報告		イラクの戦場	思い	

図4	人間	戦争	謎	ウイルス関連	ウイルスとの闘い	発生地	病との闘い	歴史	第一次世界大戦中	記録	残す	医学	進歩する
①	人間同士	戦争をする	謎	ウイルス	襲いかかる								
	人間												
②				重症…症候群									
				新型肺炎									
③				患者	広がる	中国							
						香港							
						世界各地							
④				症状									
				インフルエンザ									
⑤	人間	戦争					病との闘い	歴史					
⑥				インフルエンザ				近代史	第一次世界大戦中	最悪の記録	残す		
									1918年				
⑦						世界				死者の数			
										2千万人			
⑧				『インウイルス』						億単位の説			
⑨				同書		アメリカ			当初				
									新兵器				
⑩									潜水艦				
									Uボート				
									ドイツ兵				
⑪					悩まされる				前線				
⑫				インフルエンザ					戦死者	死者			
									部隊				
⑬								歴史の間	報道管制				
⑭			謎								残される		
⑮						発生地							
						アメリカ説							
						中国南部説							
⑯									あのころ			医学	進歩する
⑰				新型肺炎	油断できない								
					恐れることない								
⑱				新種の病気	裏をかく							医学	進歩する
					出てくる								
⑲							病との闘い						
⑳	人の命			先の書	軽視される								
				インフルエンザ	奪う								
				新しい疫病	力を集める								
㉑	人類	戦争			警告		大事な闘い						
		血を流し合う											

図5	時	場所	行動	桜	咲く・散る	修羅	ことば	四月	山田太一	編む	生きるかなしみ	杉山龍丸	戦争	記録	家族	戦死する
①	夕暮れ時	いつもの角	曲がる	白いもの	たちのぼる											
②		こんな所	立ち止まる	桜												
③		東京		(桜)	散り始めた											
④	いつの年			(桜)	枝を離れる様	修羅	言葉									
⑤						修羅	ことば	四月の底								
⑥						宮沢賢治			脚本家	編む	「生きるかなし」					
						「春と修羅」			山田太一							
⑦										集める	生きていること	作家	戦後	一文		
										十数編	どんな生	夢野久作	復員事務			
											かなしみ	長男				
												杉山龍丸				
⑧													苦しい仕事		留守家族	亡くなった
															息子さん	死んだ
															御主人	死んだ
																死んだ
⑨															小学２年	
															女の子	
															父親	
⑩															お父さん	戦死する
⑪															少女	
⑫															母	ない
															２人の妹	
															病の祖父母	
⑬									山田さん	記す			戦争なき	こうした記録		
									私							
⑭					散らされる	修羅		四月			人の命					
⑮											生					
											生きるかなしみ					

〔注１〕塩澤和子1994「社説の文章構造―語句の反復表現を手がかりとして―」『文藝言語研究　言語篇』25　筑波大学
〔注２〕寺村秀夫他編2002（10刷）『ケーススタディ　日本語の文章・談話』　おうふう　70頁～81頁参照

［参考文献］

1．池上嘉彦1983「テクストとテクストの構造」『談話の研究と教育』（日本語教育指導参考書11）国立国語研究所
2．市川孝1978『国語教育のための　文章論概説』教育出版
3．塩澤和子1994「社説の文章構造―語句の反復表現を手がかりとして―」『文藝言語　研究　言語篇』25　筑波大学
4．塩澤和子2000「文段分析の一考察（１）―語彙的手段による反復―」『文藝言語研究　言語篇』37　筑波大学
5．高崎みどり1986「文章の語句的構造」『国文』64号お茶の水女子大学国語国文学会
6．寺村秀夫他編2002（10刷）『ケーススタディ　日本語の文章・談話』　おうふう
7．永野賢1986『文章論総説』朝倉書店
8．馬場俊臣1986「『主要語句の連鎖』と『反復語句』との交渉」　永野賢編『文章論と国語教育』朝倉書店
9．林四郎1987「文の承接に伴う語の意味の展開」　『漢字・語彙・文章の研究へ』明治書院
10．牧野成一1980『くりかえしの文法』大修館
11．泉子・Ｋ・メイナード1997『談話分析の可能性』くろしお出版
12．Ｍ．Ａ．Ｋ　ハリディ・ルカイヤ．ハサン1997『言語学翻訳叢書　第８巻　テクストはどのように構成されるか―言語の結束性―』ひつじ書房